

イベリヤ半島における有声化とケルト語基層説について¹⁾

阿 部 三 男

1 はじめに

ロマンス諸語の発展過程において、イタリア北部の Spezia-Rimini の線を境に東西ロマニアの対立が見られることは、Wartburg によって指摘されたが、この東西ロマンス諸語への分化過程で重要な役割を果たしたと一般に考えられてきたのが、西ロマニアの先住民族であったケルト族の言語影響である。本稿では、イスパノ・ロマンス諸語における母音間無声破裂子音の有声化を取り上げ、ケルト語基層説の適用に際しての問題点を指摘するとともに、その変化要因として、ごく一般的な、それが故により説得力を有すると思われる言語内の説明を加えたいと思う。

2 ケルト語基層説

西ロマニアに属するガロ・ロマンス諸語、イスパノ・ロマンス諸語、レト・ロマンス諸語では、ラテン語の /P, T, K/ が母音間及び母音と /R/ の間で各々 /b, d, g/ と有声化した。

Lat.	Ptg.	Sp.	Cat.	Prov.	Fr.	It.	Rum.
RĪPA	riba	riba	riba	riba	rive	ripa, riva	ripā
VĪTA	vida	vida	vida	vida	vie	vita	vitā
PATRE	padre, pai	padre	pare	paire	père	padre	---(tatā)
PETRA	pedra	piedra	pedra	peira	pierre	pietra	pietrā
AMĪCA	amiga	amiga	amiga	amiga	amie	amica	amicā
FOCU	fogo	fuego	foc ²⁾	fuec ²⁾	feu	fuoco	foc

ところが、西ロマニヤ一帯に居を占めたケルト族の言語にも同じような現象が見い出されるところとして、西ロマンス諸語の有声化はケルト語の影響に帰されてきた。例えば Mohl, Windisch, Bartoli, Dauzat, Meillet, Pope, Terracini, Whatmough, Tovar, Menéndez Pidal, Lapesa, Martinet, Jungemann, Delattre 等は程度の差こそあれケルト語基層説を支持している。これに対し Meyer-Lübke を筆頭に、Vendryes, Wartburg³⁾, Gray, Malmberg, Alarcos, Weinrich⁴⁾, Bustos Tovar, Fowkes 等はこの仮説に否定的である。

3 ケルト族⁵⁾

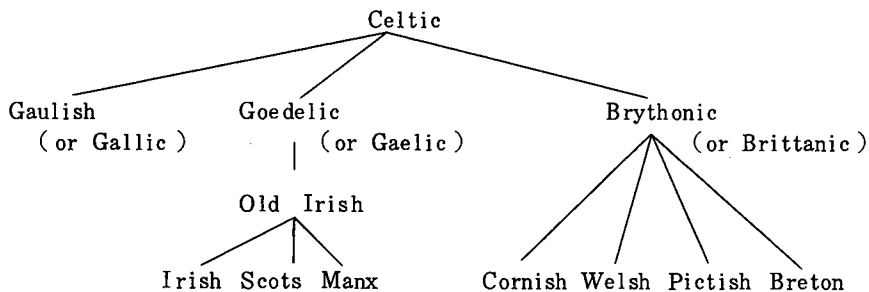
ケルト族の居住地はドイツ東方からバルト海に及ぶ地域と推定されるが、紀元前 900 年頃今のドイツにはいり、紀元前 800 年頃にはゲルマン民族の圧迫を受け一部は今の英国諸島に進出した。後に「外ガリヤ (Gallia Ulterior)」と呼ばれた今のフランス全域を占めたのは紀元前 600 年頃である。イベリヤ半島への部分的侵入は既に紀元前 900 年頃に見られるが、半島西部、北西部及び内陸部への本格的移動が行われたのは紀元前 600 年頃であ

る。紀元前Ⅲ—Ⅳ世紀には半島内陸部の北東地域、つまり現在の Burgos, Logroño, Soria, Guadalajara, Navarra 南部, それに Zaragoza と Teruel の西部地域に定着したケルト人は原住民であるイベリヤ人と混血し、ケルト・イベリヤ人と呼ばれる部族を形成した。一般にケルト族は半島侵入後 Asturias, Galicia, Lusitania (ほぼポルトガル全域), Guadiana 川中流以北のスペイン西部, それに半島内陸部を占めたとされている。しかし一方では、内陸部のケルト・イベリヤ族を除く大部分のケルト族は先住民族の謀叛に会い、紀元前Ⅲ世紀頃には Galicia 北西部と半島南西部(ポルトガル南部)に追い遣られたとも言われている。ただ、当時の状況を示す社会学的資料は皆無に等しく、ましてやローマ人侵入後の両民族の人口比、ローマ人との接触の緊密度などについてはほとんど何も知られていない。

なお、ケルト・イベリヤ族は従来イベリヤ語を採用していたと考えられていたが、その後印欧語の格変化語尾、接尾辞、印欧語の語根を持つ単語といった特徴が発見され、イベリヤ族からは文化的借用を受けたであろうが、使用言語としてはケルト語を保持したことが分かった。

4 ケルト諸語⁶⁾

ケルト語は大陸ケルト語と島嶼ケルト語に分類され、前者にはゴール語(Gaulish)が属し、後者は更にゴイデル語(Goedelic)とブリソン語(Brythonic)に二分される。島嶼ケルト語の区別は印欧共通基語の唇軟口蓋音^{*}/K^w/の変化に基礎をおき、ゴイデル語は軟口蓋音/K/を保持しているのがQケルト語(Q-Celtic)と呼ばれ、ブリソン語は/P/に変えたのでPケルト語(P-Celtic)とも呼ばれている。⁷⁾ なお、この点では大陸ケルト語のゴール語とイタリア半島北部のリグリアで話されていたケルト語(Lepontic)はPケルト語と言える。



島嶼ケルト語の中で最古のアイランド語はⅤ世紀頃のオガム文字(Ogam)の碑文に始まり、Ⅷ世紀頃からまとまった文献で知られるようになる。その他の島嶼ケルト語はもっと新しく、Pケルト語群中で有名なウェールズ語とブルトン語はⅩ世紀頃、コーンウォール語の記録は中世後期に現われる。一方、大陸ケルト語はⅣ—Ⅴ世紀まで残存したらしいが、固有名詞・若干の語彙及び貧弱な碑文によって知り得るに過ぎないのである。イベリヤ半島⁸⁾のケルト語についてはその多くがQケルト語で、しかもQケルト語とは言えゴイデル語とは非常に異なる特徴も備えていたことが知られている。その上語彙的にはゴール語とはとても異なる性質が見られるという。SchmollによればQケルト語のケルト・イベリヤ語は原始ケルトに等しいものであったらしい。また原始ケルト語は印欧共通基語の/P/を語頭で消

失しているのに対し、ローマ時代の碑文に既に現われていた Sp. Port. paramo (Skt. páramah) には PIE/P/ が保たれていること、及び考古学的研究などからケルト以前の印欧語民族の存在も確実視されている。

ところで半島のケルト語はどの地域で勢力を持っていたのだろうか？ Corominas はケルト語の語彙的名残りがポルトガル語、ガリシヤ方言、レオン方言に豊富なことから、半島内陸部よりも半島北西部をケルト語の侵透地域と考えている。しかしそれとは逆に Schmoll はこれまで内陸部で発見されたケルト語の碑文の数が圧倒的に多いことから、ケルト語は半島内陸部において支配的であったと想定している。ケルト語基層説の支持者は大体 Corominas と同じ意見なわけだが、内陸部には混血民族のケルト・イベリヤ族が居住しており、Schmoll の指摘通り多くの碑文も無視できない。

5 ケルト諸語における軟音化現象⁹⁾

ケルト語では、母音間の単子音、母音と /l, r, n/ に挟まれた破裂音及び /m, s, u/ 等に弱化が見られ、これには軟音化 (lenition, mutation or aspiration) という名前までついている。ケルト語の軟音化は西ロマンス諸語のそれと違って、語内のみならず語頭にも見られ、かなり複雑な様相を呈している。

Proto-Celtic	Old-Irish	Welsh	Breton	Cornish
<i>c < k, q</i>	<i>ch</i> [x, ç]	<i>g, ch</i> [x, ç]	<i>g</i>	<i>g</i>
<i>t</i>	<i>th</i> [θ]	<i>d, th</i> [θ]	<i>d</i>	<i>d</i>
<i>p < g^u</i>	<i>ch</i> [x, ç]	<i>b, ff</i> [f]	<i>b</i>	<i>b</i>
<i>g</i>	<i>gh</i> [r]	φ	<i>c'h</i> [x]	<i>u, φ</i>
<i>d</i>	<i>dh</i> [ð]	<i>dd</i> [ð]	<i>d, z</i>	<i>d, th</i>
<i>b</i>	<i>bh</i> [β]	<i>b, f</i> [β]	<i>v</i>	<i>v</i>
<i>m</i>	<i>mh</i> [β̃]	<i>f</i> [β]	<i>v</i>	<i>v</i>
<i>z</i>	φ	<i>gw</i>	<i>w</i>	<i>w</i>
<i>s</i>	<i>h, φ</i>	—	—	(z)
<i>su</i>	<i>f, b</i> [t, β]	<i>hu, chu</i> [xw]	<i>c'hau</i> [xw]	<i>hu</i> [xv]

例：PIE^{*}ekwos > OIr. ech, Welsh ebol Gaul. Epo-「馬」

PCelt.^{*}katus > OIr. cath, Welsh cad「戦」 Gaul. Catu-

PCelt.^{*}bitus > OIr. bith, Welsh byd Gaul. Bitu-「世界」

PIE^{*}uper-「上に」> Ir. for, Welsh gwr-, Bret. gour, Gaul. ver-

PCelt.^{*}ce-can-it > OIr. cechain「彼は歌った」

Ir. bó (基本形) > an bhó [ən wo:]「その牛」、dubh (基本形[du]) > an bhó dhudh [ru]「その黒い牛」

上の図からも分かるように、言語差はあるにせよ島嶼ケルト語には確かに軟音化が起こっている。だが古代島嶼ケルト語における軟音化の時期は言語による違いは勿論のこと、子音の種類によってもまちまちであったようである。Gray (1944, p. 224) は、ブリソン語とゴイデル語の資料から判断する限りでは、ケルト語の軟音化は遅くても紀元後 400 年までは大体出揃っていたであろうと推測している。また Lockwood (1978, p. 180) は、「語頭子音が連音状態の発話でしばしば変る、島嶼ケルト語の著しい音変化は紀元後ほぼ 450 年

から 550 年の間にアイルランド語とブリテン島のケルト語の両方で起きた二次的発達の結果である。その変化自体は発生が音声的なものであるからサンスクリット語の連声(sandhi)の法則と比較することができる。」と述べている。

ところで大陸ケルト語はどうかと言えば、Gray は貧弱な資料をもとにゴール語を調べた結果、島嶼ケルト語と同様恐らくここにも軟音化が起こっていたであろうという結論に達した。Pedersen と Meillet もこれを認めている。勿論ゴール語の軟音化に懐疑的な学者もいる。Dottin や Weisgerber などがそうである。大陸ケルト語では軟音化現象の現われが非常に少なかったというから無理もないであろう。なお地名・人名などの資料から Gray (1944, p. 228) は軟音化の最も古い時期を次のようにまとめている。

I 世紀：p > b(?), b > v, b > m(?), g > c, g > h, m > v, m > v > b, rm > rv

II 世紀：b > p(?), s > h(?), sr > fr

V 世紀：c > ch, g > i

VI 世紀：c > g, g > φ

VII 世紀：c > (g) > φ, t > d

VIII 世紀：c > (g) > h, gl > il

メロヴィンガ王朝期(448～752年)：br > vr

年代不明：t > th, t > th > d, b > v > m, bn > vn > mn

上に示した現象例 24 通り(そのうち 4 通り疑わしい)のうちフランス語とレト・ロマンス語(Engadine 方言)に現われるのは、c > (g) > φ, t > d, g > i, g > φ, b > v, br > vr の 6 通りだけである。反対にゲール語には d > φ の記録がないのに対し、古代フランス語にはそれが見られる(Lat. AUDIRE > OFr. oir, Fr. ouir, Sp. oir, Engad. udir, It. udire; Gaul. bodi-“勝利”, Welsh budd, OIr. bóid, búaid)。またゴイデル語にはない軟音化例 bn, mn > [vn], br > [vr], rm > [rv], sr > [fr], g > i がゴール語に見られることから、ゴール語はゴイデル語よりブリソン語(Welsh: fn, fr, rv, ffr, i)に近い関係にあったろうと思われる。一方ケルト・イベリヤ語¹⁰⁾の場合にも、軟音化を示しているような、形容詞の最上級と思われる例：Ledaisama (< *Pletis⁰ma : OIr. leth, Corn. les, Bret. let, led) と ueramos, uoramos (< *uper⁰mos : Ir. for, Welsh gwr-, Bret. gour, Gaul. ver-) が見つかっている。勿論詳しいことは未だ知られていないが。¹¹⁾

結局、軟音化現象は島嶼ケルト語で目立ち、その上ウェールズ語や古アイルランド語では西ロマンス諸語の有声化とは異なる、むしろ gorgia toscana に似た摩擦化(p > [x, ç, φ], t > [θ], k > [x, ç]) も起こっていることなどから考えて、「緩音現象はケルト語が各言語に分化する以前の共通時代から完全に出来上っていたのではない。この特殊な現象の萌芽と傾向はそこにあったとしても、それが音韻法上の一定の法則として実現し適用範囲を拡大したのは、分化後の各言語においてであった。そしてこの現象も大陸ケルトの諸言語にはそのあらわれが少なかった。しかし全く現われなかったのではない。」という泉井久之助(1968, p. 172) の推論が今のところ最も適切かと思われる。また島嶼ケルト語の著しい方言分化を考えると、西ロマンス諸語に影響を及ぼせるだけの言語学的好状況を広大な西ロマニヤの大陸ケルト語に一樣に想定することはかなり困難と思われる。

6 俗ラテン語における有声化現象

6.1 西ロマニヤ

俗ラテン語において、母音間の無声破裂子音の有声化に先だって起こったのが有声破裂子音の摩擦化である。先ず半母音 /w/ の摩擦化と /b/ の弱化によって有声摩擦音 [β] が形成された。Grandgent (1962, §§263, 283, 318)によると、/b/ [β] はI世紀に始まり、II世紀にはかなり進み、III世紀には少なくともイタリアでは一般化している。また、/g/ [ɣ] はII世紀以降、/d/ [ð] は俗ラテン語期の終わりだと推定している。しかしAppendix Probi (200~320年頃)の“adipes non alipes” 或はConsentius (V世紀)が咎めている“peres pro pedes” などから見て、/d/ [ð] についてはGrandgentよりも早い時期が考えられるだろう。

有声化の例は既にポンペイ遺跡に残る多くの落書きやイタリア中央部の碑文の中に見られる： amatus ~ amadus, locus ~ logus, mecum ~ megum, oportet ~ opordet, pacatus ~ pagatus, triticum ~ tridicum, Viriotal ~ Viriodal, etc.¹²⁾

イベリヤ半島における有声化の時期については、Tovar, Wartburg¹³⁾がI世紀と想定しているが、その根拠は決定的なものではない。Tovarの説は後で述べることにして、ここではよく引用される古い例を挙げるだけにする。

- : imudavit < INMUTAVIT (Mérida, II世紀)
- perpeduo < PERPETUO (Braga, Norte de Portugal, IV世紀)
- reguiescat < REQUIESCAT (Tarragona, V世紀)
- pontivicatus < PONTIFICATUS (Guadix, 652年)
- iubentudis < IUVENTUTIS (Torredonjimeno, occid. de Jaén, VII世紀)
- lebra < LEPRO (Mérida, VII世紀)
- Rovine (v < f, Torredonjimeno, VII世紀)
- eglesia < ECCLESIA (Bailén, 691年)

なおVIII世紀以降では、Menéndez Pidal (1968, §§45-47)が、半島北部に現存する最古の文書の中に有声化例を見つけている： felgarias < FILICARIA, sebaratus < SEPARATUS (775年, Asturias)。

一方ガリヤでは、Pope (1966, §336)によると有声化はV世紀に始まり、VI世紀末には一般化している。Gregorio de Tours (593年)とFredegario (VII世紀)にその例が多いという。Grandgent (1962, §256)¹⁴⁾も俗ラテン語の有声化については碑文などに見られる frigare や migat, それにアングロサクソン語からの借用語から判断して、Popeと同様間違いなくV世紀に始まり、VI世紀からその例が多くなると言っている。Palmer (1968, p. 159)は西ロマニヤではV世紀(及びそれ以降)、Väänänen (1971, §106)は少なくともガリヤではV世紀以降と推定している。しかしWartburg (Baldinger 1972, p. 242)のようにIII世紀に遡られるという学者もいる。因にサルジニヤ語の有声化は中世末期に始まったらしい(Wartburg 1971, pp. 42-43 nota 6)。またイタリア中・南部の諸方言では現在有声化が進行中である¹⁵⁾。いずれにしてもIII~VI世紀と言えば、大陸ケルト語は優勢言語であるラテン語の支配下であってその勢いを失い、消滅の一途を辿っていたと思われるが、果してそのような大陸ケルト語に十分な影響力が期待できるだろうか？ これとは逆に、母音間子音の弱化はむしろラテン語本来の傾向ではないかと思わせるような事柄を幾つか挙げるができる。例えば、帝政初期から現われる有声破裂子音の摩擦化・消失

が、ケルト語基層のないローマ、ラティウム (Latium) 及び南イタリアで頻繁に起こっているのに対し、外ガリヤと内ガリヤでは稀であるということ。また、中央イタリアの碑文に見られる有声化それにローマを中心に南イタリア、サルジニア及びアフリカにも見られる直し過ぎ (ultracorrección) の例などがそれである。¹⁶⁾

6.2 イベリヤ半島

Tovar (1948, 1961) が半島の碑文を調べたところ、母音間無声破裂子音の有声化と母音間有声破裂子音の消失を示すと思われる前ローマ起源の人名、部族名それに神々の名が半島北部、北西部 (ポルトガル北部を含む) 及び Extremadura を中心に分布しており、しかも西部から東部にかけて有声化例の段階的減少が見られるという。Tovar はこれらの有声化例をローマ起源語のそれと結びつけ、ケルト族の居住地との地理的一致を理由にケルト語基層説を唱えている。しかし一見説得力のありそうな Tovar の例も、ほとんどが語源及び年代が不明で実証性を欠いている。ここでその例を幾つか見ることにしよう。

先ずラテン語の例としては、imudavit (Mérida, II 世紀), perpeduo (Braga, IV 世紀), reguiescat (Tarragona, V 世紀), iuuentudis (Torredonjimeno, VII 世紀), lebra (Mérida, VII 世紀), eglesia (Bailén, 691 年), Flainus (Lena, 西ゴート時代), aunculus (半島北部と Cáceres 州, 年代不明), Austo (Oviedo, 年代不明) を挙げている。¹⁷⁾ しかし地理的には前ローマ起源の語を取り巻くように分布し、ケルト・イベリヤ族の強力な根拠地であったはずの Castilla 東部にはラテン語の有声化例が全然見当たらない。逆に、勢力のあるケルト族の定住についてあまり明らかでない Extremadura や非印欧語地域の Bailén, Torredonjimeno, Guadix, Tarragona¹⁸⁾ には有声化が起っている。従って、Tovar が論拠としている前ローマ起源の語とラテン語例の分布上の一致がいかに頼りないかが分かる。

次に非ラテン語系の最も古い例として、西暦 27 年の Tridiaui と Bedoniesis (ともに t) d, Astorga), 152 年の Auolgigorum, Visaligorum, Cabruagenigorum (以上 k) g, Astorga) を挙げている。Tridiaui の基語形としては *Tritianus を想定し、同類の変化形 Tridallus, Tridai, Tridonicu の対応形として Tritius を考えているが、Untermann (1965, p. 175) の調査によると、Trit- という無声音形が圧倒的に多い。¹⁹⁾ Bedoniesis については、同じ語根の Bedunus と Bidunien [sem] も示し、その対応形として B[a]etania, Betuna を考えているが、有声音形 (-d-) と無声音形 (-t-) では地理的分布が異なっており、解釈が難しい。また Auolgigorum, Visaligorum, Cabruagenigorum (k) g) は接尾辞 /-iko-/ の有声化例であるらしいが、ケルト族の居住地であったと言われている Lusitania 東部及び半島内陸部に非常に多く残っている無声音形 (-c-) の存在も無視できない。その他興味深い例として、Ambaicus (く *Ambadicus (く Ambaticus), Amainius (く *Ambatinus), Amaonicum (く *Ambatonicum) が挙げられるが、イスペイン・ロマンス諸語には動詞のような特別な場合を除いては /t/ > /φ/ の変化がなかったことを忘れてはなるまい。また /p/ > /b/ の変化例らしいものが一つもないというのも実に不確かな論拠と言えよう。

結局 Tovar の言語資料を見る限りでは、仮に基層言語に有声化傾向があったにしても、Tovar が想定している有声化の時期 (紀元後 I 世紀) にはラテン語の有声化例が少ない。これと比べると、ケルト語基層のないポンペイなどで発見されたラテン語の有声化例の方がより確かであろう。

6.3 León の俗ラテン語

Menéndez Pidal (Orígenes del español, §§ 45-47 & 95)によると, León, Castilla, Aragón のX~XI世紀の文献に現われた有声化例は, Leónで“un máximo”, Castillaで“un término medio”, Aragónで“un mínimo”の数値を示すと言っている。このような半島西部から東部にかけて見られる有声化例の段階的減少に加え, 半島西部はケルト族或は前ケルト族の居住地であり, 母音間子音の有声化及び消失はケルト語の特徴であるという点から, Tovarのケルト語基層説を全面的に支持している。

さてここで問題になるのはLeón王国で使用されていた言語の特徴である。これはよく知られていることだが, 当時León王国には“romance corriente”(日常会話で使用), “latín escolástico”(教会ラテン語, 年代記者, 学識者も使用), それに“latin vulgar”(俗ラテン語)という三種類の言葉があった。初め二つは他のどの地域にも見られるが, 俗ラテン語はLeón王国の公証人(notario)の間でしか使われず, その他の地域ではほとんど書かれることはなかった。しかもこの俗ラテン語の使用者は少数のモサラベ出身の公証人であり, León出身の他の公証人はLeónとCastillaの古文書に見られる, より教養的なラテン語(latín escolástico)を使っていた。

ところで, この俗ラテン語の特徴としてMenéndez Pidal(1968, §95-1)は十個ほど挙げているが, 何よりも特徴的なことは母音間無声子音/p, t, k, f/の有声化であるという: artigulo(870年), judigare(908年), logo(929年), confirmada(929年), excomunicatus(932年), prado(939年), semedarium(947年), exido(947年), uindigare(947年), etc.

León王国のこの俗ラテン語はロマンス諸語形成期(V~VI世紀)に半島全域で話されていた俗ラテン語の生残りと思われるが, フランスでも特にVII~VIII世紀にこれに似た俗ラテン語が認められ, やはりここでもイベリヤ半島に劣らない位有声化が進んでいたようである。²⁰⁾更に重要なことは, León王国での俗ラテン語の使用者がモサラベであったということである。当時León王国は国土回復戦争(Reconquista)の中心地で, 再植民運動が活発に行われ, 各地から多くの入植者があった。なかでもX世紀のLeón王国におけるモサラベの影響は歴史的にもよく知られている。モサラベはアラビヤ人侵入時話されていた西ゴート時代のラテン語を継承しているが, このことはLeón王国の保守的性格とも一致すると言われている。またAndalucíaのモサラベの間にも, この俗ラテン語と同じと思われる“latinum circa romancium”の存在が確認されている(Menéndez Pidal, 1968, §95-3)。

ところでこの有声化の例はFernando I世の頃から減少が見られるが, 1090年代には上で述べた俗ラテン語に代わりlatín escolásticoが用いられるようになった。その理由として, クリュニー修道院の改革が考えられる。つまり, クリュニー系修道院を中心とする肅正運動によって, モサラベの慣習・儀式が廃止され, モサラベの影響が次第に消えていったからである。

結局, Menéndez PidalがX~XI世紀のLeónとCastillaにおけるロマンス語(romance corriente)の有声化の度合を推論する際に, もしLeónのモサラベが用いた俗ラテン語(latín vulgar)を比較の対象から外し, 両地域のlatín escolásticoだけを比較したならば, LeónとCastillaにおける有声化の現われに恐らく量的・質的差はなかったろうと思われる。²¹⁾

なお, バスク語基層説が唱えられているAragón地域での母音間無声破裂子音の保持につ

いては別の機会に詳しく論ずることにするが、Bustos Tovar (1960, PP. 93-94) によれば当時の Aragón 地域には確かに無声音維持傾向が見られるものの、Menéndez Pidal の資料から推測されるほど有声化に対する抵抗は強くなかったようである(例: caput Foguzada 771年, fluvium Nogaria 786年……ともに Aragón 東部より)。

7 言語内的説明

Alarcos (1968年, §150) はローマ帝政期からロマンス諸語萌芽期にかけて母音間で起こった①有声破裂音の摩擦化(/b/ > [β], /d/ > [d̪], /g/ > [g̪]), ②無声破裂音の有声化(/p/ > /b/, /t/ > /d/, /k/ > /g/), ③重子音の単子音化(/pp/ > /p/, /tt/ > /t/, /kk/ > /k/) に対し、母音間における子音の弱化という音声学的説明と①②③の関係を考慮した構造主義的説明とを併用している。ただし、上記の音韻変化過程における②と③の関係については、次に引用するように、二つの可能性を示唆している。

“Pero hay que tener en cuenta la lentitud en la generalización de los fonéticos y la relación sistemática de estos fenómenos. Es decir, que los tres fenómenos están en relación, unos arrastran a los otros : el fenómeno de la sonorización, típico del occidente, ha triunfado porque había geminadas que tendían a simplificarse, o bien las geminadas se simplificaron porque previamente las simples sordas se modificaron, empujando a (o arrastradas por) las sonoras oclusivas que se debilitaban.” (Alarcos, 1968年, p. 243)

理由は後で述べるとして結論だけを先に言うなら、筆者としては後者即ち「重子音は単子音が先に有声化したので単子音化した」とする説明を採用したい。

一方、Martinet (1952, Lg. 28. 192-217) は島嶼ケルト語と西ロマンス諸語における子音推移の並行性に目をつけ、構造主義的説明を加えるとともにケルト語の影響を想定している。Martinet は、重子音(geminates)があらゆる位置によく現われ、その頻度がそれとペアを組む単子音のそれに匹敵する程の言語では、話し手は無意識のうちに調音に要する時間・エネルギーを減少させる傾向が予想されると説明している。しかし西ロマンス諸語の場合、実際には単子音化よりも摩擦化・有声化が先に現われていること、それにイタリア語のトスカナ方言における gorgia と重子音保持を考えると、重子音の圧力が有声化誘発の第一義的要因として重くのしかかっていたとは思えない。Martinet (1975年, p. 72) は、有声化例が先に現われたことについては、弁別維持のためには単子音の有声化が完了して初めて重子音の単子音化が行われるのだと反論している。確かに音韻対立保持という構造主義的見方は注目すべきであるが、それでは重子音の存在が有声化の本質的条件であるということの説明にはならない。やはり重子音の圧力は強調すべきではなく、むしろ母音間での有声化は最小努力の法則²²⁾に従った一般的な同化現象であるという音声学的事実を考慮すべきではないだろうか？

また、Martinet は島嶼ケルト語における子音推移のもう一つの基本的条件として、「弱くて語境界を示すことができないアクセント」を挙げ、当時強化の一途を辿っていたと思われる俗ラテン語のアクセントはこの条件に反するとしてケルト語の影響を示唆している。しかし軟音化には語境界を示すことができない弱いアクセントが必要だというこの条件もやは

り実証性に欠ける。同じ仮説なら逆に M. Pei (1976年, pp. 286-288) のように、ラテン語のストレスアクセント傾向が一定量の発声エネルギーを強勢母音に集中し過ぎたため、発声エネルギーの配分量が少ない無強勢母音と母音間子音に弱体化、消失が生じたと推論することもできる。²³⁾ いずれにしても、ストレスアクセント型の言語にも母音間子音の有声化はよくあるということ、それに島嶼ケルト語の子音推移と並行した現象とは言え、音声環境次第では語頭にまで軟音化を発達させている島嶼ケルト語とは違って、西ロマンス諸語では語内子音を弱めはしたが、語頭子音はむしろ強める傾向にあったことを忘れてはいけない。

それでは重子音の単子音化はどう説明したらいいのだろうか？ その要因として先ず無声破裂音の有声化が残す穴を埋めようと働く構造的作用が考えられる。また西ロマンス諸語では、Lat. /kt/ > Fr. /it/, Sp. /tʃ/ (< [i t]), Lat. /ks/ > Fr. /is/, OSp. /s/ (< [is]) のように音節末において、いわゆる内破音の弱化が見られるが、これは開音節構造の形成²⁴⁾ と子音群の単純化傾向²⁵⁾ を示すものであり、重子音の単子音化はその一環として捉えることができる。

ところで、この母音間での有声化に関して Bonfante (1947年, p. 346) は、母音間で有声化が起こっていない地域 (It. prato) 或は有声破裂音が母音間で無声化する地域 (Gk. ἄρω, Lat. agō : ON aka) がある以上、母音間という位置は有声化の要因説明にはならないと主張している。更に言語変化について次のように説いている。

The neolinguists claim therefore that every linguistic change — not only phonetic change — is a spiritual, human process, not a physiological process. Physiology cannot EXPLAIN anything in linguistics; it can present only the conditions of a given phenomenon, never the causes. …… Since phonetic change, like every linguistic change, is a spiritual fact, it is free, not bound by any physical or physiological necessity. (p. 346) …… The neolinguists think, like Leonardo, Humboldt, and Ascoli, that languages change in most cases because of ethnic mixture, by which they understand, of course, not racial mixture but cultural, i.e. spiritual. In this spiritual sense, and only in this, the terms “substratum”, “adstratum”, and “superstratum” can be admitted. (p. 352)

ここでまず問題なのは言語変化を精神的過程とする観念論的態度である。このような精神主義では音韻変化の過程を具体的に規定することはできない。²⁶⁾ また言語変化は精神的混合の結果であると言っているが、言語がそのような混合に関係なく絶えず変化していることは通時的にも共時的にも多くの言語事実が証明してくる。最後に有声化について言うと、たとえ母音間で有声化が起こらない地域があるにしても、それだけでは母音間という音声環境において、子音が前後音の影響を受ける普遍的傾向が否定されるものではないだろう。問題はその傾向が西ロマンス諸語においても実際行われたかを認め得るか否かである。勿論、筆者自身、労力の経済或は音声連鎖上の調音の容易化に起因する母音間での同化作用というだけでは充分な説得力があるとは思わない。しかし、だからと言ってケルト語の影響がこの傾向の顕在化を促したというにはあまりに問題が多過ぎる。

8 結 び

基層説と言えば普通言語交替期に征服言語が先住民族の発音習慣の影響を受けるという仮説であるが、北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドに移植された英語が別の言語を話す人の発音習慣による音変化を受けなかったこと²⁷⁾などから考えても、基層説そのものに問題がないわけではない。

言語接触による影響の効果は確かに社会的条件によって左右される面が大きい。にもかかわらず、ほとんどの場合、二言語併用期の社会言語学的論拠が皆無に等しく、全て推論の域を出ないと言わざるを得ない。本稿で取り上げた有声化の場合も同じで、大陸ケルト語に有声化を一樣に想定した上、更に劣勢言語のケルト語が優勢言語のラテン語にその影響を可能ならしめる社会言語学的好状況をあの広大な西ロマニヤに一樣に想定しなければならないのである。²⁸⁾ 基層言語の作用を認めることは正に稀有の状況を予想するものだと言えよう。²⁹⁾ やはりこれらの疑問が解明されるまでは基層説の適用に際しては慎重な態度をとるべきではないだろうか？

また、言語基層のない地域でも類似した音韻変化が起こっていることは、基層言語の影響がなくてもその変化が別の要因で充分起こり得ることを示している。母音間子音の有声化の場合も、ケルト語基層のない Venezia, Friuli, Gascogne, Corsica, Sardegna, イタリア中部・南部にその例が見られる。

結局、音韻変化の要因を探る場合、筆者としては基層言語の作用に有利な稀有の状況を期待するよりは音声学的或は構造的要因を優先したい。ごく一般的な、より説得力のある説明があるのに、実証性に乏しく計量しがたい言語外的要因に訴えるのは危険ではないだろうか？

〔注〕

- 1) 本稿は昭和 53 年 6 月 25 日 (日) に東京外国語大学で開催された東京スペイン語学研究会の第 29 回研究発表会において同じ題名で口頭発表した内容を改訂・増補したものである。
- 2) /o/ を消失して /g/ が語末音になった時 /c/ に変化した。
- 3) (Wartburg 1951, p. 63) Auf den ersten Blick scheint die Ausdehnung dieses Lautwandels der Verbreitung der gallischen Substratwirkungen zu gleichen. Doch fehlt im Keltischen jede Grundlage dafür, und wenn wir genauer zuschauen, so sehen wir, daß diese Zone auch Venezien und Nordafrika umschließt.
- 4) (Weinrich 1969, p. 62, note 24) Ich sehe ab von anderen Unstimmigkeiten in der Keltenthese, auf die M. Pei (Rom. Rev. 34, 237) aufmerksam macht: auch Venetien und Friaul, wo keine Kelten gesiedelt haben, kennen die Sonorisierung. Dieses Argument wiegt m. E. stärker als die statistischen Erhebungen, die A. Tovar (BRAE 28, 265-280) und Menéndez Pidal, Orígenes §45f, an frühen iberoromanischen Dokumenten angestellt haben.
- 5) Asián Peña (1959, pp. 20-21), Corominas (1972, pp. 207&245-247), 泉井 (1968, pp. 159-174), Jungemann (1955, pp. 37-38), Tovar (1961, pp. 104-105)

- 6) Corominas (1972, pp. 248-249), 高津 (1969, pp. 43-46), Krahe (1970, 下宮訳 第3, 12, 17章), Lehmann (1967, 松浪訳 pp. 28-29), Lejeune (1972, pp. 265-271), Lockwood (1976, 永野訳 pp. 46-48), Palmer (1972, p. 388)
- 7) PIE *k^wetwer-, *k^wetur-, *k^wetǵ- > OIr. cethir, Gaul. petru-, OWelsh petguar (MWelsh pedwar), Corn. peswar, Bret. pevar (高津, 1969, pp. 44-45の注2)
- 8) Corominas (1972, pp. 251-252)
- 9) Fowkes (1940), Gray (1944), Hamp (1951), 泉井 (1968, p. 168), Jungemann (1955, p. 142), Lockwood (1976, 永野訳 pp. 179-196)
- 10) Jungemann (1955, pp. 37-38, 47-48, 141-142)
- 11) Tovar (1961, p. 79) The voicing of intervocalic stops is not a characteristic trait of Celtiberian, and moreover the texts in Iberian letters do not allow us, of course, to decide this question.
- 12) Bourciez (1967, §171), Iordany Manoliu (1972, §183), Bassols de Climent (1971, §233), Väänänen (1971, §106)
- 13) Baldinger (1972, p. 242), Wartburg (1971 b, .52 note 1) Weinrich (1969, §141)
- 14) According to Loth 21-26, intervocalic *c, p, t* were voiced in Gaul in the second half of the sixth century. Rydberg, *Franz.* 9 I, 32, maintains, on the evidence of inscriptions and manuscripts, that *t > d* in the fifth century and the beginning of the sixth, while *c > g* at least two centuries earlier.
- 15) Jungemann (1955, p. 133), Lausberg (1965, §362), Rohlf (1966, §209), Tekavčić (1974, §225), Weinrich (1969, §58, §160)。なおフランス語の摩擦音 [θ] (< Lat. /-D-, -T-/) の消失はIX世紀末に始まり, XII世紀末に完了したようである (Fouche 1966, Vol. III, p. 600)。
- 16) Bustos Tovar (1960, pp. 75-81, 104-105)
- 17) 他に idem ~ item (27年, 152年) という混乱例もある (Tovar 1961, p. 93)
- 18) カタルーニャ語における有声化の時期についてはよく知られていないが, Gili Gaya によるとカタルーニャ語の有声化は Castilla や Ribagorza と同じ位古かったようである (Bustos Tovar 1960, p. 95)。
- 19) Clodamenis (Cloutius, Clutamus, Clutius) についても同じことが言える。Untermann (1965, pp. 102-103) によると, 有声化形は 23 例中わずか 2 例である。
- 20) Bustos Tovar (1960, p. 89, nota 122), Menéndez Pidal (1968, §95-2) Pei (1976, p. 283)
- 21) Bustos Tovar (1960, pp. 106-107)
- 22) 人間が言語活動において肉体的にも精神的にもできるだけ抵抗の少ない道を通る傾向は通時的にも共時的にも多くの言語変化が証明している。Jespersen (1968, Chap. XIV §§ 6-7), Martinet (1970, §4)

- 23) (Pei 1976, p. 288) This theory offers a cause for the "economy of effort" on the part of the speakers. They are trying to make things easier for themselves, but not out of sheer sloth or carelessness; rather, because of a redistribution of vocal energy, of which they have only a limited supply. If they use too much of it on the stressed vowel, not only will all unstressed vowels suffer (some more than others depending on their position) but also the more exposed (i.e. intervocalic) consonants. It is no accident that a language that shows the greatest degree of diphthongization of stressed vowels, like French, likewise shows the greatest degree of weakening and fall of unstressed vowels, and of weakening and occasional fall of exposed consonants.
- 24) Malmberg (1949, 1952, 1953, 1961, 1962)
- 25) 原 (1968, p. 32), Jungemann (1955, pp. 153-189), Tekavčić (1972, §§ 207-214)
- 26) Paul (1965, 福本訳 §38)
- 27) Brosnahan (1961, p. 189)
- 28) 原 (1968, p. 43), Jungemann (1955, p. 152)
- 29) Saussure (1942, 小林訳 p. 202)

参 考 文 献

- Alarcos, Emilio (1968): *Fonología del español*. Madrid: Gredos
- Asián Peña, José L. (1959): *Manual de historia de España*. Barcelona: Bosch
- Badía Margarit A. (1951): *Gramática histórica catalana*. Barcelona: Noguer
- Baldinger, Kurt (1972): *La formación de los dominios lingüísticos en la Península Ibérica*. Madrid: Gredos
- Bassols de Climent, M. (1971): *Fonética latina*. Madrid: C.S.I.C.
- Bonfante, Giuliano (1947): *The Neolinguistics Position*. *Language* 23. 344-375
- Bourciez, Édouard (1967): *Éléments de linguistique romane*. Paris: Klincksieck
- Brosnahan, L. F. (1961): *The Sounds of Language*. Cambridge: W. Heffer & Sons
- Bustos Tovar, E. de (1960): *Estudios sobre asimilación y disimilación en el ibero románico*. *RFE*, Anejo LXX. Madrid: C.S.I.C.
- Catalán, Diego (1974): *Lingüística Ibero-Románica*. Madrid: Gredos
- Corominas, J. (1972): *Tópica Hespérica: Estudios sobre los antiguos dialectos, el substrato y la toponimia romances*. Madrid: Gredos
- (1976): *Elementos prelatinos en las lenguas romances*

- hispánicas. [Actas del I coloquio sobre lenguas y culturas prerromanas de la Península Ibérica, pp. 87-164 (Universidad de Salamanca)]
- Craddock, J.R. (1969): *Latin Legacy versus Substratum Residue*. Berkeley and Los Angeles: University of California
- Delattre, Pierre (1970): *La théorie celtique et les substrats*. *Romance Philology* 23, 480-491
- Díaz y Díaz, M.C. (1962): *Antología del latín vulgar*. Madrid: Gredos
- Elcock, W.D. (1971): *The Romance Languages*. London: Faber & Faber
- Entwistle, W.J. (1969): *The Spanish Language, together with Portuguese, Catalan and Basque*. London: Faber & Faber
- Fouché, Pierre (1952, 1958, 1966): *Phonétique historique du français*. Paris: Klincksieck
- Fowkes, R. A. (1940): *The Phonology of Gaulish*. *Language* 16, 285-299
- Gómez-Moreno, M. (1925): *Sobre los iberos y su lengua*. Homenaje ofrecido a Menéndez Pidal 3, 475-499
- Grandgent, C. H. (1962): *An Introduction to Vulgar Latin*. New York: Hafner
- Graur, A. (1929): *Les consonnes géminées en latin*. Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion
- Gray, L. H. (1944): *Mutation in Gaulish*. *Language* 20, 223-230
- Hall, Robert A., Jr. (1946): *Bartoli's "Neolinguistica"*. *Language* 22, 273-283
- Hamp, Eric P. (1951): *Morphophonemes of the Keltic Mutations*. *Language* 27, 230-247
- 原 誠 (1968): *イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(上)*. 「ロマンス語研究」3, 21-32 & 43
- (1974): *ロマンス諸語比較研究とスペイン語通時言語学とのくいちがい*. 「東京外国語大学論集」24, 1-18
- (1976): *言語学における構造主義* 「ロマンス語研究」10, 22-39
- Haudricourt, A. G. et Juilland, A. G. (1949): *Essai pour une histoire structurale du phonétisme français*. Paris: Klincksieck
- Iordan, Iorgu y Manoliu, Maria (1972): *Manual de lingüística románica*. Madrid: Gredos
- 泉井久之助 (1968): *ヨーロッパの言語*, 岩波新書
- Jakobson, R. (1962): *Principes de phonologie historique*. *Selected Writing* 1, 202-220 (Mouton)
- Jespersen, O. (1968): *Language, its Nature, Development & Origin*. London: Allen
- Jungemann, Frederick H. (1955): *La teoría del sustrato y los dialectos hispano-romances y gascones*. Madrid: Gredos

- Kent, Roland G. (1966): *The Sounds of Latin, A Descriptive and Historical Phonology*. New York: Kraus Reprint Corporation
- 高津春繁 (1968): 比較言語学, 岩波全書
- …………… (1969): 印欧語比較文法, 岩波全書
- Krahe, H. (1954): *Sprache und Vorzeit* (Heidelberg) [言語と先史時代(下宮忠雄 訳) 紀伊国屋書店, 1970]
- Lapesa, R. (1968): *Historia de la lengua española*. Madrid: Escelicer, S.A.
- Lausberg, H. (1965): *Lingüística románica, I*. Madrid: Gredos
- Lehmann, Winfred P. (1962): *Historical Linguistics* [歴史言語学序説(松浪有 訳) 研究社, 1967]
- Leujune, Michel (1955): *Celtiberica*. [Acta Salmanticensia (Filosofía y Letras, Tomo VII, núm. 4), Universidad de Salamanca]
- …………… (1972): *Celtibere et Lepontique. Homenaje a Antonio Tovar*, pp. 265-271 (Madrid: Gredos)
- Lockwood, W. B. (1971): *Indo-European Philology*. London: Hutchinson [比較言語学入門(永野芳郎 訳), 大修館書店, 1976]
- Malmberg, B. (1949): *La structure syllabique de l'espagnol*. *Boletim de filologica* 9, 99-120.
- …………… (1952): *Occlusion et spirance dans le système consonantique de l'espagnol*. [Melanges de philologia romane offerts à Karl Michaelsson, pp. 356-365 (Göteborg)]
- …………… (1953): *Gémiation, force et structure syllabiques en latin et en roman*. *Orbis litterarum*, suppl. 3, 106-112.
- …………… (1961): *Linguistique Ibérique et Ibéro-Romane*. *Studia Linguistica* 15, 57-113
- …………… (1962): *La structure phonétique de quelque langue romane*. *Orbis* 11, 131-178
- Martinet, A. (1952): *Celtic Lenition and Western Romance Consonants*. *Language* 28, 192-217
- …………… (1970): *Economie des changements phonétiques*. Berne: A. Francke
- …………… (1975): *Evolution des langues et reconstruction*. Presse Universitaires de France
- Meid, W. (1972): *Old Celtic Languages*. [Th. A. Sebeok (Ed.): *Current Trends in Linguistics* 9, 1201 (The Hague: Mouton)]
- Meillet, A. (1952): *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: Klincksieck
- Menéndez Pidal, R. (1950): *Modos de obrar el substrato lingüístico*. *RFE* 34, 1-8
- …………… (1968): *Orígenes del español*. Madrid: Espasa-Calpe
- Meyer-Lübke, W. (1924): *La sonorización de las sordas intervocálicas*

- latinas en español. RFE 11, 1-32
- Mohl, F. G. (1976): Introduction à la chronologie du latin vulgaire.
Genève: Slatkine Reprints
- Muller, H. F. (1929): A Chronology of Vulgar Latin. Halle(Saale):
Max Niemeyer
- Nielsen, N. A. (1952): La théorie des substrats et la linguistique
structurale. Acta Linguistica 7, 1-7
- Palmer, L. R. (1968): The Latin Language. London: Faber & Faber
..... (1972): Descriptive and Comparative Linguistics. A Critical
Introduction. London: Faber & Faber
- Paul, Hermann (1965): Prinzipien der Sprachgeschichte [言語史原理
(福本喜之助 訳), 講談社]
- Pei, Mario (1976): The Story of Latin and the Romance Languages.
New York: Harper & Row
- Pope, M. K. (1966): From Latin to Modern French with Special
Consideration of Anglo-Norman. London: Manchester University Press
- Rohlf, Gerhard (1966): Grammatica storica della lingua italiana e dei
suoi dialetti, Fonética. Torino: Giulio Einaudi editore
(1977): Le Gascon, études de philologie pyrénéenne.
Tübingen: Max Niemeyer
- Saussure, F. de (1942): Cours de linguistique générale. [言語学原論
(小林英夫 訳) 岩波書店]
- Tekavčić, Pavao (1974): Grammatica storica dell'italiano, Volume 1:
Fonematica. Bologna: il Mulino
- Schmidt, K. H. (1976): The Contribution of Celt-Iberian to the
Reconstruction of Common Celtic. [Actas del I coloquio sobre
lenguas y culturas prerromanas de la Península Ibérica, pp. 324-
342 (Universidad de Salamanca)]
- Tovar, A. (1948): La sonorización y caída de las intervocálicas y los
estratos indoeuropeos en Hispania. BRAE 28, 265-280
..... (1961): The Ancient Languages of Spain and Portugal.
New York: S. F. Vanni
- Untermann, J. (1965): Elementos de un atlas antroponímico de la
Hispania antigua. Madrid: C. S. I. C.
- Väänänen, Veikko (1971): Introducción al latín vulgar. Madrid: Gredos
- Vicens-Vives, J. (1969): Atlas de historia de España. Barcelona: Teide
- Wagner, M. L. (1951): La lingua sarda. Berna: A. Francke
- Wartburg, Walther von (1951): Die Entstehung der romanischen Völker.
Tübingen: Max Niemeyer
..... (1971a): La Fragmentación lingüística de la
Romania. Madrid: Gredos

- (1971b): Évolution et structure de la langue
française. Berne : A. Francke.
- Weinreich, U. (1967): Languages in Contact. The Hague : Mouton
- Weinrich, Harald(1969): Phonologische Studien zur romanischen
Sprachgeschichte. Münster Westfalen : Aschendorffsche
Verlagsbuchhandlung